分　科　会	小６年③	郡　市　名	岡　崎
提　案　者	岡崎市立竜美丘小学校		吉　原　樹

１　研究主題『学ぶ喜びをわかち合い、共生社会をめざした生き方を問う社会科の授業』
～６年　「十六神将　鳥居元忠　家康に懸ける！」の実践を通して～

２　はじめに

岡崎市社会科部では研究主題『学ぶ喜びをわかち合い、共生社会をめざした生き方を問う社会科の授業』を受け、３年間の研究を重ねて、本年度は４年次を迎えた。これまでの３年間の研究によって次のような成果や課題が挙げられる。

〈実践単元〉○１年次・・・６年「戦国大名　徳川家康の生き方」
○２年次・・・４年「鴨天大祭と青木川のつけかえ」
○３年次・・・６年「地域の特色を生かした町づくり」

〈成果〉
・日々の生活の中で見聞きする人物や行事、学区の町並みなどのように、子供たち自身が身近に感じられるものを教材に選定することで、学習への関心を高め、追究意欲を向上させることができた。（１～３年次）
・追究活動において、話し合いの場を設けることで、他者の考えと自分の考えを比較検討することができ、子供たち相互に学びをわかち合うことができた。（１～３年次）
・追究過程において、課題解決の支援となるような体験活動や資料提示を行うことで、子供たちは社会事象を多角的にとらえたり、問題に対する確かな考えを見い出したりすることができた。（２年次）
・学区の町の未来について、確かな根拠を基にして意見交換したり、行政へはたらきかけたりする学習の場を設けることで、子供たち自身が地域の一員としての自覚を深め、地域と共生していこうとする思いを高めることができた。（３年次）

〈課題〉
・共生社会を実現化していくための思いを持ったり、考えを発信したりすることで、子供たちは自らの生き方を見直すことはできたが、どのようにして現代社会での生き方に方向性を見い出すかが、課題として残った。

３　研究主題のとらえ

学ぶ喜び・・・疑問に思ったことや追究課題に対し、学習を通して解決し、また、確かな根拠に立った思考や理解を基として、他者とかかわり合う中で、より確かな学びとなったときに沸き起こる感情

わかち合う・・・自分の考えと他者の考えとを比較検討する中で、新たな疑問を見い出したり、自分の考えに深まりを持たせたりすることができる学習場面

共生社会をめざす生き方を問う・・・
社会事象における人々の営みに見えてくる願いや思いに自ら迫ることで自分と他者との生き方における価値観を比較検討し、新たな価値観を構築したり、他者への共感を覚えたりすることができる。その上で、より良い社会の実現に向けて自らの生き方を見い出すこと

⇩

戦国時代に生きた４武将（信長、秀吉、家康、鳥居元忠）の生き方をとらえることで、当時の社会事象や背景を理解したり、生きることに対する多様な価値観を知ったりすることができ、より良い社会の実現に向けて自分の生き方を見い出そうとする

４年次を迎えた今年度は、６年生歴史分野「十六神将　鳥居元忠　家康に懸ける！」を研究単元に設定した。鳥居元忠（岡崎市渡町出身で幼少の頃よりずっと家康に仕えた）という人物の生涯を追うことで、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康という３人の武将に出会うことができ、戦国時代の社会事象や背景を理解したり、この時代に生きた大名たちの様々な生き方も知ったりすることができる。これ

により、平和な現代に生きている子供たちの人生観をゆさぶることができ、「社会に生きる」ということについて考えたり、意欲的に追究したりする姿が期待できるものと考え、研究単元に選んだ。

まず、単元の導入で家康が天下を取るきっかけとなった「伏見城の戦い」に関する資料を示す。鳥居元忠の壮絶な最期に出会うことで、子供たちは、「自分ならそこまではできない」という思いを基として、「元忠はなぜ家康のためにそこまでできたのか」という疑問を持つことができ、元忠が家康に懸けた思いに近づいていこうとしたり、「信長や秀吉は家康と何が異なるのか」という視点を持って、意欲的に３人の武将の歩みを調べることができると考えた。元忠の生涯を追う中で、３人の武将の歩みも調べることで当時の歴史事象や背景をも理解できる。また、家康が秀吉の傘下に降る場面では、元忠自身にも秀吉から誘いがあったことを紹介し、「元忠は秀吉の誘いにのるべきか」を課題として、話し合いの場を設定する。子供たちはこれまでの学びを根拠としながら意見を述べ合い、新たな価値観や考えを知ることで、学びをわかち合うことができるものと考えた。

さらに、家康の幕府政策を調べることで、家康の軍事力や政治経済力、人物像を深くとらえ、元忠が信長や秀吉ではなく、家康に懸けた思いに、子供たち自身が共感を覚えることができ、戦国時代に生きた主な武将たちの生き方と、現代に生きる自分たちの生き方を比較し、より良い社会の実現に向けて自分の生き方を模索することができるようにしたいと考えた。

４　めざす子供像

戦国時代を生きた４武将の生涯や生き方に対して、自分の生き方と比較検討して考えたり、武将たちの思いについて迫ったりすることで、現代社会に生きる自らの生き方について方向性を見い出すことができる。

５　研究仮説と手だて

（研究仮説）

【仮説１】　「学ぶ喜びをわかち合う」

教材開発や単元の構成を工夫しながら学習を進めれば、子供たちは課題解決への意欲を掻き立てられ、意欲的に調べたり話し合ったりすることができるだろう。

〈手だて１〉・・・教材との出会わせ方の工夫　→　追究課題の把握

〈手だて２〉・・・調べ学習の場の確保　→　課題解決へ向けた意欲的な学習

【仮説２】　「学ぶ喜びをわかち合う」

資料を活用したりまとめたりできるような学習カードを工夫し活用すれば、戦国時代の歴史事象や背景を理解し、４武将の生き方に対する自分の考えを構築できるだろう。

〈手だて３〉・・・調べ学習に活用できる学習カードの工夫

→　戦国時代の歴史事象や背景、人物像への理解。４武将の生き方に対する自分なりの意見の構築。

【仮説３】　「共生社会をめざした生き方を問う」

戦国乱世を生きた４武将の生涯に対して、共通の土台の上で話し合いの場を設定すれば、かかわり合いを通して戦国時代を生きる４武将たちの思いに迫ったり、現代社会に生きる自らの生き方を見い出したりすることができるだろう。

〈手だて４〉根拠に基づいた判断が出せるような話し合いの場の設定

→　人物の生き方や思いに迫る姿。現代社会に生きる自分の生き方への模索。

6　単元計画

課題	時	〈子どもの意識〉	〈教師の活動〉
課題を見い出す場	2	学習課題　学習知識　子どもの意識や意見 ①～②時　天下分け目の前哨戦を見よう ・わずかな人数で西軍の大軍と戦うなんて、負けるに決まっているじゃないか。 ・鳥居元忠という人は、少数で戦うなんて無謀な人だったのかな。 家康のために、なぜ元忠は自分を犠牲にすることができたのかなあ。	・教材に出会い、追究課題に対して意欲的に取り組んでいけるようにするために、「伏見城の戦い」の資料を配付する。【手だて１・３】 ・家康のために討死したことから、信長・秀吉と家康との政治力や人間性の違いをとらえることができるように、人物調べの時間を確保し、必要資料を配布する。 　また、調べた内容をまとめることができるように、学習カードを配布する。【手だて２・３】
追究する場	9	戦国時代を生きた３人の武将と、元忠の歩みを調べていこう ③～④時　【織田信長】 （主な政策や出来事等） ・鉄砲活用と長篠の戦い ・対延暦寺と一向宗、キリスト教保護 ・室町幕府滅亡、楽市・楽座 ・本能寺の変　など ・信長は新しいものを取り入れる目が優れていたんだね。 ・戦いでは残酷な戦いもしたんだよ。 ・信長は冷酷で独裁者だったんだ。 ⑤～⑥時　【豊臣秀吉】 （主な政策や出来事等） ・検地・刀狩　→　兵農分離 ・キリスト教一部弾圧 ・全国平定と朝鮮出兵　など ・百姓出身で全国統一するなんてすごい出世をしたんだね。 ・戦わずして勝つ方法も考えていたんだね。 ・百姓出身者が武器や年貢をたくさん取って、農民の信用を得られたのかな。 ⑦時　【徳川家康】 （主な出来事等） ・幼少期の人質生活 ・三河一向一揆平定 ・信長との同盟、秀吉への服従　など ・子どもの頃から大変な苦労に耐えた人だったんだね。 ・信長や秀吉という力ある人につくことで勢力を広げたんだよ。 ・優秀な人材を大切にしたんだね。 ⑧時　【鳥居元忠】 （主な出来事等） ・１３歳から家康の人質生活に追従 ・家康の領土拡大に、数多くの戦で貢献し、出世する　など ・家康と苦楽を共にした生き方だったんだね。 ・戦で足に障害を受けても、家康のためにその後も働くなんて、たくましい人だな。 ・幼いときから家康と一緒に苦労ばかりで、たいへんだったのだろうな。 ・元忠は信長や秀吉の勢力拡大や支配の仕方を見て、仕えてみたいと思わなかったのかなあ。 ⑨時　元忠決断の時！秀吉の誘いに乗るべきだろうか （肯定派の主な意見） ・戦のない社会になって安心だ。 ・五大老、五奉行で政治体制を整えていて、経済力も豊かなので国作りがしっかりしていて信頼できる。 ・秀吉の下ならもっと出世できる。など （否定派の主な意見） ・朝鮮出兵により戦の負担がなくならず秀吉では戦いが続き信用できない。 ・大名間が対立し、秀吉の統率力には疑問が残る。 ・秀吉に仕えたら、家康のために尽くしてきた意味がない。　など 裏切りが当たり前の時代に、好条件を蹴ってまでなぜ家康に尽くそうとしたのかなあ。 ⑩～⑪時　家康の天下統一を見ていこう ・「関ヶ原の戦い」では家康に味方した大名が多かったということは、家康に従った方が生き延びられたということだね。 ・江戸幕府が長く続くように政治経済の仕組みを工夫し、国を支配する力が高い人なんだね。 ・国を治めるためには軍事力だけでなく、政治経済力や人々から支持される力もあったから、元忠は家康のために尽くすことができたんじゃないかな。	・読解困難な内容を理解しやすくするために、資料を簡易なものに書き下して提示する。【手だて３】 ・元忠像を追究する中で、各資料ではとらえきれない点を克服できるように、元忠の子孫の方を招いて聞き取り学習できる場を設ける。【手だて２】 ・軍事力、経済力ともに信長や秀吉に劣るにもかかわらず、家康に仕える元忠の思いや生き様について考えることができるように、「秀吉の誘いにのるべきだろうか」における、話し合いの場を設ける。【手だて４】 ・根拠を基にした意見が述べられるように、思考時間を確保する。 ・友達の意見と自分の意見を比較検討できるように、内容を整理して板書する。 ・裏切りが当たり前の時代であったことをつかみ、忠義の美に偏って否定派の立場にならぬよう、家康を離れて秀吉の家来になった人がいたことを紹介する。 ・最後まで家康に懸けた元忠の思いに迫ることができるように、誘いを断った事実を伝える。 ・家康の支配者としての力量を理解できるように、「関ヶ原の戦い」や江戸幕府の仕組みについて調べたりまとめたりできる時間を確保する。【手だて２・３】 ・元忠の家康に対する思いに迫れるように、「伏見城の戦いで自刃できたのか」における話し合いの場を設ける。【手だて４】
まとめの場	1	⑫時　戦国時代を振り返ろう ・３人の武将によって世の中が統一されていき、戦のない時代がきたんだね。 ・下の身分の人たちが、支配者を選ぶという側面もこの時代にはあったんだね。	・戦いのない時代が到来したことを理解できるように、「元和偃武」の意味を紹介する。

7　研究実践

（１）児童Ａ、児童Ｂ（抽出児童２人）の実態

児童Ａ　学力上位。何事もきちんと行うことができる。一方で、自ら積極的に挙手をして意見や発表をすることはほとんどない。

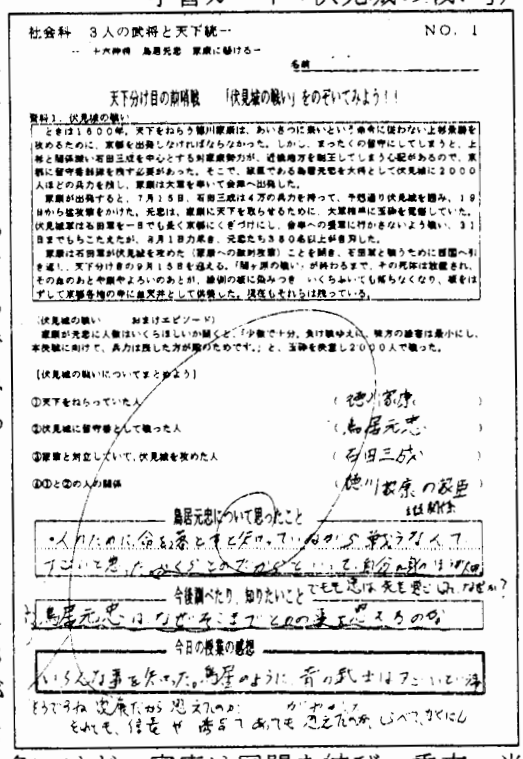
児童Ｂ　努力型でこだわりをもって調べたりまとめたりする。自ら積極的に挙手をして意見や発表もできる。一方で、根拠を伴わずに感情論で意見を述べてしまうことがある。

※２人とも、１学期間の歴史学習によって、歴史への興味関心が高まってきていることがうかがえる。

（２）導入－衝撃的な感情から、追究意欲を高める課題設定－ 資料１．（第１時　児童Ｂ

①第１～２時　教材に出会う

学習カード「伏見城の戦い」）


社会科　３人の武将と天下統一　　NO. 1

～ 十六神将　鳥居元忠　家康に殉ける ～

名前

天下分け目の関ヶ原戦　「伏見城の戦い」をのぞいてみよう！！

資料１．伏見城の戦い

ときは１６００年、天下をねらう徳川家康は、あいさつに来いというが命令に従わない上杉景勝を攻めるために、家康も出発しなければならなかった。しかし、まったくの留守にしてしまうと、上杉と結託し、石田三成を中心とする対家康勢力が、近畿地方を制圧してしまう心配があるので、家康に留守番部隊を残す必要があった。そこで、家臣である鳥居元忠を大将として伏見城に２０００人ほどの兵力を残し、家康は大軍を率いて会津へ出発した。

家康が出発すると、７月１５日、石田三成は４万の兵力を持って、予想通り伏見城を囲み、１９日から総攻撃をかけた。元忠は、家康に天下を取らせるために、大軍相手に互角を電撃していた。伏見城軍は石田軍を一日でも長く京都にくぎづけにし、会津への援軍に行かせないよう戦い、３１日までもちこたえたが、８月１日力尽き、元忠たち３８０名以上が自刃した。

家康は石田軍が伏見城を攻めた（家康への謀叛攻撃）ことを聞き、石田軍と戦うために西国へ引き返し、天下分け目の９月１５日を迎える。「関ヶ原の戦い」が終わるまで、その死体は放置され、その血のあとや顔やよろいのあとが、絵図の城に染みつき　いくらふいても拭ちなくなり、城をはずして京都寺地の中に血天井として供養した。現在もそれらは残っている。

（伏見城の戦い　　おまけエピソード）

家康が元忠に人数はいくらほしいか聞くと、「少数で十分。負け戦ゆえに、敵方の被害は最小にし、本決戦に向けて、兵力は残した方が勝のためです。」と、互角を決意し２０００人で戦った。

【伏見城の戦いについてまとめよう】

①天下をねらっていた人　（徳川家康）

②伏見城に留守番として戦った人　（鳥居元忠）

③家康と対立していて、伏見城を攻めた人　（石田三成）

④①と②の人の関係　（徳川家康の家臣）

鳥居元忠について思ったこと

・人のために命を落とすと知っていながら戦うなんてすごいと思った。なかなかできないと自分に思った。

今後調べたり、知りたいこと　でも、元忠は先を見こしたのだ？

・鳥居元忠はなぜそこまでこの戦えたのか

今日の授業の感想

いろんな事を知った。鳥居のように昔の武士はすごいと思

そうですね　家康から　恩を受けたから　だから　それも、信長や　秀吉　であっても　恩を受けたから　しべて　かくに

（伏見城の戦い　おまけエピソード）

家康が元忠に人数はいくらほしいか聞くと、「少数で十分。負け戦ゆえに、敵方の被害は最小にし、本決戦に向けて、兵力は残した方が勝のためです。」と、互角を決意し２０００人で戦った。

【伏見城の戦いについてまとめよう】

①天下をねらっていた人　（徳川家康）

②伏見城に留守番として戦った人　（鳥居元忠）

③家康と対立していて、伏見城を攻めた人　（石田三成）

④①と②の人の関係　（徳川家康の家臣）

鳥居元忠について思ったこと

・人のために命を落とすと知っていながら戦うなんてすごいと思った。なかなかできないと自分に思った。

今後調べたり、知りたいこと　でも、元忠は先を見こしたのだ？

・鳥居元忠はなぜそこまでこの戦えたのか

今日の授業の感想

いろんな事を知った。鳥居のように昔の武士はすごいと思

そうですね　家康から　恩を受けたから　だから　それも、信長や　秀吉　であっても　恩を受けたから　しべて　かくに

「関ヶ原合戦図屏風」から気づくことをまとめたところ、家康がこの戦いに勝利し、天下人となっていくことを全員で確認できた。次に、黒板に１枚の似顔絵を掲示し、家康に天下を取らせた男と紹介して「この人物はだれか」と問いかけたが誰も分からなかったので、「鳥居元忠」と教えた。すると、「だれその人？」、「それはどんな人なの？」と反応があり元忠の最期である「伏見城の戦い」の資料を与えた（**手だて１・３**）。元忠に対し、当初は軽くとらえていた子供たちも、家康のために討ち死にするという元忠の行為は衝撃的であり、児童Ｂのように「なぜそこまでできたのか」という思いを３８人中２８人の子供が抱き、「主君が信長や秀吉であっても同ことができただろうか、家康だからできたのか」という疑問が浮かび上がった。

（２）追究活動－戦国時代の事象や背景をつかむ学習－

①第３～４時 信長の政策や出来事をとらえ人物像に迫る

信長について調べたりまとめたりできる時間を設けたところ（**手だて２・３**）、Ａは信長の先見的な一面を評価し、Ｂは感情論的に否定し信長と家康とを比較した結論を出したが根拠が浅い。また、Ｂのように感情論的に信長を否定的にとらえる子供が目立ったので、「信長を否定的にとらえる子が多いけど、家康は同盟を結び、秀吉・光秀など活躍した武将の多くが使えていたのはなぜか」と問いかけた。すると、「強さ」という点で多くの子供は一致し、「強い人につけば出世できる」、「戦いに勝てて安心できる」という意見が出た。続けて「出世や安心は当時の人々にとってどんな意味があるの」と投げかけると、「生きていける」と答えた。Ａ・Ｂ共にこれらの意見に一致しており、信長には多くの人が付き従う力があることを理解でき、戦国時代を生きることの大変さに迫ることができたようであった。

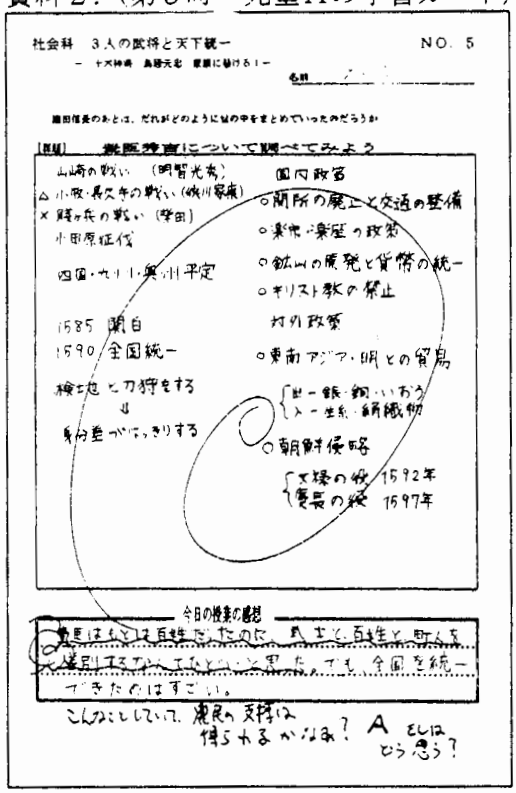
児童Ａの感想・意見	児童Ｂの感想・意見
（第１～２時後　元忠への思い）	
どうせ負けるから、兵力は殿のために使った方がいいと言えるのはすごいし、自分ではできないし言えない。	人のために命を落とすと知っていて戦うのはすごい。いくら殿のためでも自分の命が大切。昔の武士はすごい。どうして家康のためにそこまでできたのか。
（第３時後　信長への思い）	
自分以外を見下し、使えなければ古い家来も追放する人だが天才。人が今までやったことないことを考える天才だが自己中心的なところがある。	人を簡単に殺してしまうのはよくない。こんな人だから元忠は長年過ごした家康じゃないといけないと思う。
（第４時　信長へ仕えた理由についての意見）	
頭がよくて強かったから。権力があるからがんばれば（能力）農民とかふつうの人でも使ってもらえるから	強いから。裏切ると殺されるかもしれない。
（第４時後　信長への思い）	
誰を選ぶかで運命が決まるなんて怖いと思った。信長はたくさんの人に支持されるすごい人だった。	戦国時代はいつ死ぬかわからず（今も）その日の選択で生きるか死ぬかが決まってしまう一面があるとわかった。

②第５～６時　秀吉の政策や出来事をとらえ、人物像に迫る

本能寺の変の後、「信長の後を誰が継いでいくのか」の疑問を解決するべく、秀吉について調べていくことにした（**手だて２・３**）。Ａは全国平定に至る主な戦いや、政策を調べることで兵農分離政策を否定しながらも戦乱の世の中を治めた点を高く評価した。

一方ＢはＡほど深く調べることができず、クラス全体でも同様の子供がやや目立ったので、秀吉への学習を深められるように、調べたことを発表し合う場を設けた。これにより、「全国平定に至る戦い」、「刀狩・検地→一揆を防ぐ、身分の固定化」、「関所撤廃・交通整備→楽市楽座」「鉱山開発、貨幣の統一・貿易→経済政策」、「キリスト教禁止→宗教政策」、「朝鮮出兵→外交」、「大阪城建設→秀吉の本拠地」等、秀吉に関わる歴史事項をクラス全体でとらえることができた。さらに、秀吉の政策を見ることで、秀吉が目指した国づくりへの思いに迫れるように「秀吉はどのような国づくりを目指したのか」について話し合いの場を設けてみた（**手だて４**）。Ａは意見を述べなかったがＣ４の「秀吉にとって都合がいい国」という点に同調していた。Ｂは、クラス全体で発表し合ったことを生かして、根拠を示して意見を述べることができ、秀吉へのとらえも中身のあるものに変わった。一方Ａは、兵農分離政策を否定し続け、農民出身でありながら農民のことを配慮していない点をあげることで、秀吉を否定的にとらえるようになった。また、Ａは授業後の感想にも「百姓のことを秀吉がいろいろと言える立場ではないし、農民は秀吉に裏切られた印象があったと思う。」と書いてあり、秀吉を否定しつつも、この時代は実力主義であり、力がある者が支配者として国を治めていたことを、とらえることができた。

資料２．（第５時　児童Ａの学習カード）



児童Ａの感想・意見	児童Ｂの感想・意見
（第５時後　秀吉への思い）	
百姓だったのに武士と百姓と町人を差別するのはひどい。でも、全国を統一したのはすごい。	名前を残すべくいろいろやっていておもしろい。
（第６時　秀吉が目指す国についての意見）	
身分差がはっきりする国で、だれも逆らえず、自分にとって都合のよい国にしたかった。	鉱山でとったものでお金を造るし、貿易もあるから経済が発展する国。
（第６時後　秀吉への思い）	
百姓出身なのに百姓を利用して自分に都合よくするなんて、最低な人だと思う。	先のことも考えていて、安定している社会を作っているし、すごい！

資料３．（第６時 授業記録 話し合い）

Ｔ１	秀吉はどんな国にしようとしたのか？
Ｃ１	秀吉が楽できる国。
Ｃ２	お金のことをしているから自分がもうかる国。
Ｂ	鉱山でとったものでお金を造るし、貿易もあるから経済が発展する国。
Ｔ２	経済以外に考えられることは？
Ｃ３	農民と差をつけた武士にとっての国。
Ｃ４	農民が一揆できず、お金もあるから自分に都合のよい国だと思う。
Ｃ５	キリスト教もだめだからやはり自分には逆らえないぞという国。
Ｔ３	誰も逆らえないなら平和が続いていいのでは？
Ｃ６	やり方にもよるよ。

③第７時　信長・秀吉と比較し、家康の前半生をとらえる

「主君が信長や秀吉であっても同じことができただろうか、家康だからできたのか」の課題を解決するべく、前時までに信長や秀吉について学習したことで、子供たちの思いに、「家康についても知りたい」という欲求が表れてきたので、家康に関する資料として、「幼少期の家康」、「信長と連合して戦った主な戦歴」、「波瀾万丈の時期」、「本能寺の変」、「小牧・長久手の戦い」、「人物採用」の項目を用意して調べ学習の時間をとった（**手だて２・３**）。Ａ・Ｂ共に家康の苦労や不遇な時代について同情したり、信長と比較して好印象でとらえていることが読み取れた。これは、クラス全体でも同様の傾向が見られた。しかし一方で、長男信康の死や戦歴の多くが信長への援軍であった点をとらえ、「信長の立場が上だ」、「勝利も信長がいたからだ」のように低い評価も出され、「元忠は、そんな家康をなぜ主君にしていたのか」という疑問が生じ、元忠の人生を調べることになった。

児童Ａの感想	児童Ｂの感想
（第７時後　家康への思い）	
信長と家康は性格が全然ちがっていて、家来を大切にしている。また、信長のことも大切にしている。でも、信長に言われて長男を殺すなんてひどい。	戦いであまり負けていないのはすごい。小さいときや若いときには、いやなことや苦労が多かったから、家来たちの気持ちもよく考えていたんだと思う。その分、家来も裏切らないと思う。

④第８時　立場の弱い家康に仕える元忠の人生を見つめる

資料読解が困難にならぬよう主な戦歴や戦功による出世を年表形式にして、資料として読み取りやすくした（**手だて３**）。Ａは家康が人質となるときに付き添ったこと、主な戦歴、伏見城での討ち死になどを調べることで、元忠は「伏見城の戦い」だけでなく、多くの戦いで活躍した大名であったことを理解し、Ｃ９の意見に同調するように「やっぱり家康のために自刃できるなんてすごい。でも、それができるぐらい家康に天下をとってほしかった。」と、元忠への感想を書いた（この意見は、第９時の話し合いの場で、子供たちの思いを一致させていく重要な意見となる）。

一方Ｂは、資料として与えたものを、ほとんどそのままに書き写すようなまとめ方になってしまったが、元忠は家康のために一貫して戦ってきていることを理解し、「元忠は家康と一緒にいて家来だけど、絆みたいなものがあるとわかった。」という感想を書き、元忠に対しても「家康と同じ道を歩んでいる。だから、家康も元忠を失うのはすごくいやだったろう。」という思いを書いていた。２人の記述から、家康と元忠の間に、固い絆や主従関係があったことを、理解できたことがうかがえた。そこで、元忠の忠誠心というか家康に対する思いに近づけるようにと思い、「もし、自分が元忠であり、他の大名から家来になれば一国もらえるという誘いがあったらどうする？」と聞いてみたところ、Ｂは「出世できるなら、この時代だしいい」と言い、あっさりと家康を見切る立場をとった。ただ、主従関係の重みをとらえながらも、戦国時代を生き抜くには実力主義として、力ある者につくのは当然という当時の価値観をＢがとらえていたかまでは読み取れなかった。Ａは「家康についていく」派として手を挙げていた。クラス全体としては、Ｂのように鞍替えするという意見が大半であった。これは、教師のねらいとは裏腹に、発問を軽々しい雰囲気でしてしまったために、子供たちの意識に「金のためなら当然」といった安易な意思表示になってしまったことや、Ｃ１０、Ｃ１１のような元忠の人生をやや否定的にとらえている子供の意見も影響していたように見えたので、この時代の特色や背景を基として、自らの生きるべく道を考えることができるように、具体的な事例を挙げて次時に投げかけてみようと考えた。

資料４．（第８時　学習カード「元忠に関する資料」）

社会科　３人の武将と全国統一　　NO.10

名前

天下取りの人柱　鳥居元忠

１５３９年に岡崎市渡町に生まれる。１３歳の時、人質として静岡の今川氏のもとにいた家康に仕えるため、数人の少年たちとともに静岡へ行く（元忠最年少であった）。

１５５８年豊田の鈴木氏攻めは家康の初陣であるが、元忠も初陣であった。その後も家康家臣として数多くの戦いで活躍した。

１５７５年の静岡県諏訪原攻めでは左足に障害を受けるが、その後も戦いに貢献した。

１５９０年の家康関東入国にあたり、千葉県矢作４万石を与えられる。

１６００年の伏見城の戦いでは、４万の敵を相手によく戦ったが、壮絶な自刃をとげる。元忠６２歳であった。このはたらきは大きく家康の天下取りの人柱になったと言える。

資料５．（第８時　授業記録「元忠への感想」）

C7	足に障害を受けても家康のためにはたらくなんてすごい。
C8	１３歳から使えているから長いつきあいだった。
C9	自刃してまで家康に尽くすなんて、家康に勝ってほしかったんだ。
C10	障害があって最後まで戦い、最後は自刃。もったいない人生だと思う。
C11	活躍しているのに大出世していない
T4	大国をもらえるなら他の殿に仕える？
B	出世できるし、この時代だしいい。

⑤第９時　戦国時代を生き抜く元忠の決断に迫る

家康が秀吉配下に降ったおりに、元忠にも秀吉の誘いがあったことを伝え、子供たちの考えに基づいた話し合いの場を設けた（**手だて４**）。子供たちの立場は３８人中、家康派が２５人、秀吉派が１２人、不明が１人であった。まずは家康派から「家康を裏切れない」、「秀吉は一度戦っているから信用できない」、「１３歳から家来だから裏切れない」というように、裏切りは卑怯だという価値観を強く示しながら意見が出された。続いて秀吉派からは、秀吉の権力の大きさを様々な理由として示しながら意見が出され、家康派が反論できない展開となっていったので、家康派には、「秀吉派の意見はもっともじゃない？乗り替える？」と何度か尋ねてみたが、家康派は一人として立場を変えよう

とする気配がなかった。そこで、「信長につく理由として、出世できる、生きられる、戦いに勝てるって、みんなで言ってたじゃない。今がその判断のときじゃないの？」と投げかけたが、やはり立場を変える者はいなかった。この段階で、元忠の生き様のごとくに、家康派はかたくなまでに「家康につく」という立場を取るということが読み取れたが、その思いに衝撃を与えようと、石川数正が秀吉の家来になった事実を伝えてみた。予想通りに大きな反応があったが子供たちは立場を変えなかったので、元忠の思いにぐっと迫れることをねらって、「どうしてそこまで家康なのか」と尋ねた。前時の学習でAが書いた感想のような意見を期待したが沈黙が続いたので、Aを指名しその感想を発表してもらい、「この意見って元忠の思いにあったと思う」と問いかけたところ、秀吉派も含めてみんなが同調した。ただし、本当にそう思わせるだけの人物なのか、この段階では判断できない点もあるので、今後の家康の人生を追うことで、元忠が本当にそう思えたのかを考えていこうということになった。

資料６．（第９時　授業記録「秀吉の誘いにのるか」の話し合い）

C12	家康を裏切れない
C13	秀吉と一度戦っていて、信用できない
C14	１３歳から家来だから裏切れない
C15	関白だし秀吉のが強い
C16	兵隊が多いし大名がみんなついている
C17	鉱山開発しお金も持っている
C18	出世ができる
T５	石川数正という人も秀吉の家来になったよ。
C19	どうしてそこまで家康なの？
A	家康に天下を取らせてやりたいと思った。

一方、Bは「主君家康が家来になるなら、元忠ものるべき」と書いていたが、Aの意見を聞いて、唯一話し合いの途中で立場を変えた。授業後の感想には、「家康を裏切らなかった元忠は、家康を信頼していて、この時代に珍しい絆がある。」と書いてあった。

⑥第１０～１１時　家康の後半生をとらえ、天下統一を見つめる

秀吉の死後における「関ヶ原の戦い」、「江戸幕府」の創設、「大阪の陣」を調べる（**手だて２・３**）ことで、家康に敵対できる勢力がいなくなったこと、特に「大阪の陣」では、旧豊臣恩顧の大名が幕府軍として参戦している点から、幕府の統率力を十分に理解できた。また、「それだけの大名が家康に従わざるを得ない、家康なりの手だてがあったのかな」と問うことで大名支配に目を向けさせ、武家諸法度や「親藩」、「譜代」、「外様」という大名ランク、大名配置についても調べることができた。さらに、宗教や経済政策なども調べることで、家康が天下統一後も、精力的に国づくりに励んでいた理由に迫ることができた。

児童Aの感想	児童Bの感想
（第１１時　家康の天下統一を学んだ後の感想）	
大阪と距離を置いて江戸幕府を開いたり天下をとった後も遊ぶことなく、いろいろな政治をしていてすごい。幕府が続くように考えて行ったなんて頭がいいと思った。	天下取ったなら遊んでもいいと思うけど、内容的に頭を使った政治がすごい。豊臣は力だけだったけど、家康は頭が優れている。

（３）まとめの場　ー戦国時代を振り返るー

①第１２時　元忠が家康に懸けた思いにせまる

家康の天下統一を学習したことで、子供たちは歴史的根拠を持って家康像を描くことができた。そこで、再度「元忠はなぜ家康のために伏見城の戦いで自刃できたのだろうか」について話し合うことにした（**手だて４**）。C21 や C22、C23 からは信長や秀吉と比較して、家康という人物をとらえた意見が多数挙げられた。また、C23 や C24 から「平和」を意識した意見が出てくるが、これは家康が長期にわたって徳川支配が続くという体制を整えた点で秀吉政権の基盤の弱さを見抜き、家康の政治力を評価しているように思える。これは、Bの意見とも関連を持ち、子供たちには「天下統一　＝平和→家康のみ実現可能」というとらえや意識があることがわかる。続けて「本当に家康は天下統一できる人なの」と切り返してみた。Aは「天下を取れると信じている。でなければ死ねない」という意見を出しBの意見とも関連した元忠の思

資料７．（第１２時　授業記録「なぜ元忠が家康のために自刃できたか」の話し合い）

C20	家康の人生をよいものにしてあげたかった
C21	信長や秀吉では、主君として不安
C22	家康は信用や信頼が持てる
C23	秀吉も統一したから平和がきたけど、内容的には長い平和がくる政治はできなかったが、家康はできたし、できる人だったから
C24	絶対平和な国にしてほしかった
B	元忠ができないことも、家康ならできると思った。たぶんそれは天下統一ということ
T6	自刃という死と交換してもいいと思えるほどの人だったの、家康は？
C25	元忠はそう思えたから、天下を取らせてあげたかったし、死を覚悟できた。
T7	家康って元忠にそう思わせるほど、本当に天下統一できる人なの？なぜ言えるの？
A	家康なら天下取れると信じている。でなければ死ねない。
C26	頭がいい、領地がいっぱい。
C27	武力や支配力もある。
T8	信長や秀吉にもあったのでは？
C28	やり方によると思う。
T9	２人には足りない点があり、家康はすべてを持っていたから天下が取れる人だった。だから元忠は家康を選び、自分の命を懸けることができた　ということかな？

いに近づいた意見を述べることができたと言える。

Aはこの単元の終わりに、「勝ち残るだけでなく、その後がさらに大切だ」ととらえており、戦国時代の頂点に立つ必要条件を、家康を通して理解し、ことをなし得た後もしっかりと足下を固めなければという人生の教訓めいたものも感じ得たようであった。一方Bは、戦国時代の厳しさと比べて、「今はもっと強く生きないといけない」と書いており今後の自分の生き方となる心構えを、持つことができたようだったし、「家康と元忠はこの時代に珍しい絆があった」ともとらえており、主君と家臣団が戦乱の世を共に生きたという姿に共感を覚えたようだった。

児童Aの意見・感想	児童Bの意見・感想
（第１２時　元忠が自刃できた理由についての意見）	
家康は家来を大切にし、幕府を長く続けるだけの頭があった人だから、元忠は家康が天下をとれると信じていた。	家康と元忠にはこの時代に珍しい絆があった。だから、元忠ができないことも家康ならできると信じていたし、それが天下統一ということ。
（第１２後　戦国時代の学習を終えた感想）	
短気な信長、頭のいい家康、織田は明智に滅ぼされ、豊臣は家康に負けるけど、３人が（他の人も）１人でもいなかったら歴史は大きく変わった。勝ち残るでだけでなく、家康みたいにその後もどうするかをちゃんとしないといけない。	いつ死ぬか分からない、いつも緊張していないといけない時代に、武士であることは勇気がいる。今の時代にはない緊張だと思う。この時代に比べれば、今はもっと強く生きないといけない。

8　研究のまとめ

（１）　仮説１について

本校学区は歴史が浅く、歴史学習における体験活動や見学学習を取り入れた学習展開は難しく、こうした学習法に駆り立てられる、意欲的な子供の姿は期待できない。しかし、本単元では、導入場面である「伏見城の戦い」から学習を始めることで、子供たちの意識に鳥居元忠の生き様に対する疑問を抱かせることができた（第 1~2 時のBの感想やクラスの反応）。また、信長・秀吉と家康を比較してとらえられるような調べ学習ができる単元の構成も工夫し、課題解決へ向けた追究心を高めることができた（各時間のA・Bの感想や授業記録）ことから、手だて１・２は確かに効果的であった。

（２）仮説２について

調べたことや考えたことをまとめることができ、かつ、調べ学習にも活用できるような資料を記載した学習カードを、毎時準備したことで、戦国時代における歴史事象や背景を理解したり、４武将の生き方に対する自分の考えを構築していくことができた（第 3~6、8、10~11 時の学習内容や感想など）ことから、手だて３は確かに効果的であった。

（３）仮説３について

「多くの有力武将が信長についたのはなぜか」、「鳥居元忠は秀吉の誘いにのるべきか」などの追究活動を支援できるように、子供たちの考えを共通の土台に乗せて話し合う場を設けたことで、子供たちは戦国時代を生きた武将の生き様をとらえ、この時代を生きた彼らの苦心や、生き抜くために力ある者を選んでついていく（そのためには裏切りは世の常であった）当時の社会観などをよくつかむことができた。その上で、同情や切なさ、はかなさ、共感など感じて、武将たちの思いに迫っていくことができた（第4、6、9、12時）。また、「現代社会に生きる自らの生き方を見い出す」という点においても、Aの「その後もどうするかをちゃんとしないといけない」や、Bの「現代においては強く生きることが大切」という意見（第 12 時）は、現代社会を生きていく２人の生き方を問い直すきっかけともなっているし、Bは「家康と元忠にはこの時代に珍しい絆があった」とも書いており、戦国時代を生き抜いた武士たちの共生についても踏み込んでいることが読み取れる。以上のことから、子供たちは共生社会について考えることができたと言えるので、手だて４は確かに効果的であった。

９．４年間の総括

第３年次までの実践によって、今後における自らの生き方に対し、切実感を持って考えることのできる子供が育ってきた。また、本年次の実践では人物の生き方について調べ、自らの持つ価値観によって評価したり、話し合ったりしたことで、子供たちは現代にはない道徳観や倫理観に気づき、自らの生き方を考え直すきっかけをつかむことができた。この４年間の研究の成果として「学ぶ喜びをわかち合い、共生社会をめざした生き方を問う社会科の授業」づくりの方向性を明確にし、手だての有効性を検証することができた。